明治３１年から３４年頃までの岐阜地区入地と学校・布教所設置のあゆみ

高橋仙蔵：記

明治３１年５月５日、高橋籐弥外１７戸で岐阜県揖斐郡、本巣郡の両郡より入地を以て岐阜部落の初めとする。

郷里を出立し青森へ着すると、植民全員を青森に残し、高橋籐弥一人で函館へ汽船で行き、同地と室蘭を経て行くべき道順を調べた上で青森に戻り、全部の移植民を連れ、海路室蘭に上陸。

同地を汽車で発ち石狩の国の空知太（注：そらちぶと：現砂川市）着１泊。神居コタン１泊、永山９号駅１泊、愛別石北峠の向下１泊、７号瀬戸瀬１泊、遠軽・湧別１泊、鐺沸１泊、海岸を常呂の市街を経て入地。

手を取り、旭川永山を経て石北峠を越え、瀬戸瀬遠軽に来たり。同所より下湧別へ出て、それより鐺沸を経て海岸を常呂市街へ着す。

これを中央道路と言い、その他には六道１本もなく、この道路は札幌から５里ごとに旅館があり、それを駅逓と言う。一路は遠軽瀬戸瀬から野付牛を経て網走へ行く。一路は下湧別を経て網走へ。この道路を泊まり重ねて当地へ来る。

その当時、常呂市街は常呂橋東の東には藤野漁場の漁夫何万人あり。その他は２戸ほどちょっとした家、その他は家らしき家なく、小屋、穴あき家１０戸ほどあり。

橋の川西には橋の元から少し来ると道の南に３戸ほどあり、北側に３戸ほど、それから２０、３０間来ると３間に５間の学校あり。そこから３０間ほど来て曲がり角の川方面に大越善三郎の家の駅逓があり、そこから道の両側にアイヌの大将、秋月善助あり。その他にアイヌの小屋１０戸あまりあり、そこから西は砂山。

注：常呂橋

明治２２年７月　常呂川に木橋を架設、渡船を廃止（常呂村史）

明治２３年７月　常呂川に木造の常呂橋架橋架け替え着工：翌年３月竣工

（道庁勧業年報　新北見市史年表）

注：学校

明治２８年５月１日　常呂教育所設置・開校授業開始：柴田直次郎方を校舎に代用

児童数１５名（男７、女８）（常呂村史　常呂小学校沿革誌）

注：駅逓

明治２５年３月３１日　鐺沸駅逓を廃し、常呂駅逓を置く。取扱人岩谷小五郎（告示）

明治２６年には、大越善三郎：常呂駅逓取扱人の名前が出ている

新市街と旧市街の中間に役介（役場）があり、半分は役場、半分は警察分署なり。時の戸長は佐藤信吉。

注：役場

明治１６年４月　常呂村外６ヶ村戸長役場開設（常呂町史）
１２月１日　常呂外６ヶ村戸長役場設置、事務取扱いを開始（告示）
明治２０年５月　紋別・常呂・斜里の戸長役場を警察署分署とする（網走市史）
注：戸長　佐藤信吉
明治３０年７月１５日　常呂外６ヶ村戸長役場より野付牛村・少牛村を分離。
常呂村４ヶ村戸長として４代目佐藤信吉発令
（明３２.６　紋別戸長として転出）

岐阜へ通じるには道はなく、草は人より高く、大木は一面にある。よって基線１号角から西１線３号角へ、そこから３号を西３線へ出て、３線をさらに２００間ほど４号の方へ上り、そこから西４線ライトコロ川まで来て、ライトコロ川に沿って川上の岐阜橋から１００間ほど下って高台べりへイカダで川を渡り、高台に沿って西５線６号へ出る、これを道路と定める。

その当時は道はなく、橋もなく、草は１丈あまりもあり、大木が繁り、太い木は直径３，４尺から７，８尺もある木ばかりで少しも前を見ることができず、むろん前方の山も見ることができない。

その当時、鳥類、狐狸の類いは道を通る人間を知らず、ゆえに人が近くに来ても連れのごとく思い、そばに来る。追っても行かず、人間がいかなるものかを知らず、棒を持って追うときは、２，３歩逃げては止まる。そのうち次第次第に近づかないようになった。

また、道がないありさまゆえ、藤野漁場の汽船が１ヶ月に１回、または２ヶ月に１回来るが、１１月に米や味噌を仕込むときは、冬期間用の食料につき、網走まで背負いに行くことが珍しくなかった。

その汽船に依頼して内地へ行くときは、乗船を願い網走へ行き、汽船に乗るのを常としていた。

注：「私が初めて岐阜入地の時、今の農協前から岐阜の方を見たら一面の草原と森林で、とても通れそうでないので、回り回ってようやく行き着くことができました」
（高橋仙蔵：談「常呂町史」）
注：明治２９年に、上杉眞治が大分県から団体移住。物資輸送困難に着眼し、網走・常呂間の磯舟（川崎船）による海路小廻業（回漕）を開始（常呂村史）
＊藤野の船が常呂・網走間の航路を持っていたという資料はなし
注：汽船
明治２１年１２月　藤野、使用帆船を汽船芳野丸に改め、函館を拠点に北見・根室への定期航路を行う（網走市史　新北見市史年表）
明治２３年　又十藤野、使用帆船を汽船芳野丸を購入して、函館を拠点に北見・根室への定期航路を行う（常呂町百年史）
明治２８年　又十藤野は、さらに大きな伊吹丸を購入して、同航路および内地への航海を行っている

このようなことなので、入地後は常時小屋にいて、前方を見ては前方へ進んできた。

入地と同時に白楊木の幹を２寸、３寸くらいにしておがみ小屋を造り、笹で屋根を葺いて入った。しかし、後にはしだいに家のように造り、家らしきものになる。
その当時は、ヤチダモの木を割って板を作り、それに縁板、井戸枠、その他壁囲いなどで風除け、割板ばかりなり。すべて活動は大木を切り、毎日その木を切り尽くしてやりおくのを仕事として開拓のしたくとした。

（略）

父藤弥が明治３１年８月中淳に故郷へ一時帰り、その間は長男仙蔵が引き受けた。しかし、９月８，９日の両日に大洪水になり、入地初年の大洪水のため食料がなく、種物もなく、まことに困却した。そのため、１０月下旬に時の侍従片岡が差し使いとなり、今の役場の裏手の砂山で武官から何とかするとのこと。そして、食料、種物の貸与があり、一同露命をつないだ。

注：明治３１年１１月　天皇陛下差遣の片岡侍従、洪水の罹災者慰問（土佐郷土史）
このことは畏れおおくも天庁に達し、片岡侍従の采配により罹災者救済として
一戸金１７銭ずつご下賜金を賜った。（常呂村史）

明治３２年１月、西４線ライトコロ川の架橋を支庁から受ける。これは尺角を並べて橋とし、長さ５間を３つ渡し、１５間の橋を請け負い、部落請負代金１５０円、土工３０円の現金、１８０円で部落民全員で架橋した。角を並べて橋としたので角橋と言う。
代金受け取りは仙蔵が代表で支庁へ行き、１０日間ほどで帰宅する。

注：救援事業として明治３２年１月に西４線４号のライトコロ川の架橋が行われた。岐阜地区の入植者が請け負って、雪を掘り氷を割り、三角のヤグラを組んで橋杭を下げるようにして、川の中をゆさぶりながら立て、杭打ちをして橋桁を置き、これに天角の角材を並べ、長さ１５間の橋がようやく完成した。これが角橋である。
この橋ができたことで、筏の渡河がなくなり、かつ工事従事の被災者１戸平均１０円の現金収入があり、これでどうやら春を迎えることができた。（岐阜百年記念誌）
「岐阜のライトコロ川は明治３２年４月まで橋がなく、網走から米を運んで来た人にオーイと呼ばれて、丸木橋をおそるおそる渡って受け取ったものでした」
（高橋万蔵：談「常呂町史）　＊丸木橋は角橋のこと、４月は記憶違いか誤植

父が４月末に戻ってくる。そのとき姉のセキらも来る。
５月に７号線西４線ライトコロ川から常呂川３号へ切り落とし排水ができた。請負人は網走町転石格次郎氏。その後、同氏は８月に常呂市街の橋も木橋で請け負い架橋する。

注：明治３２年　常呂原野排水道路開削（東２線２号～西５線７号ライトコロ川）
（大正６年網走支庁拓殖概観）
注：明治３２年８月に、常呂市街の橋を架橋したという資料はなし

常呂・野付牛間の道路は、明治３１年６月工事着手。村の有志、常呂市街の柴田真次郎、常呂原野１２号の農業中野松太郎氏らが村請けとして道路工事をする。東１線から端野に至る道路が１０月に成功、これが初めての道路となる。

注：明治３１年、常呂市街地から端野に至る幅９尺（２．７メートル）の新道が開削された。これが本町最初の道路である。（常呂町史）

明治３１年１０月、東１線役場前から浜鐺沸に至る刈り開け道路ができ、村請け負いで作る。金額は約千円くらいとして成功する。これは野付牛道路に次いで常呂村にとっては２つ目の道路となる。これによって海岸ではなく、道路を通じることを得る。

注：明治３２年１０月　常呂市街・鐺沸連絡道路開削（大正６年網走支庁拓殖概観）
注：明治３２年には、常呂市街地から鐺沸までの１里１３町（５，３４５m）の道（現サロマ湖公園線）ができ、砂丘の海岸道路に出ずにすむようになった。（岐阜百年記念誌）

その頃、内地から石狩へ、石狩から常呂へ、また内地から直接常呂へ転住する者らの法誠心（ほうじょうしん）は厚いけれども法誠に会うことができなかった。よって同志が集まり相談の結果、網走町光輪寺住職矢田谷晃師を願い、藤弥宅で報恩講を営む。その時、永住するには寺院の必要性を感じ、同師に相談したところ同師の意見、光輪寺の指図により説教所を建設、ならびに布教所の差し向けを出願する。これが常楽寺の始めとなる。明治３２年１１月下旬から出願し、父藤弥が１２月上旬に岐阜へ移民勧誘のため戻り、後は仙蔵が引き受け、諸氏と相談した。

出願の功があり、明治３３年７月に本山布教師加藤徹玄師（２５歳）が来られる。それを待ちに待っていたので、老若男女が相連れだって参拝した。次第次第に常呂市街、川沿方面から全村こぞってお参りするので仏教ごとが繁盛する。

よって7月（注：5月の間違い）に説教所を西５線３６番地に、西５線道路から東へ７０，８０間のところ、川から３０，４０間西のところに、半分は説教所、半分は学校として建設した。学校教員として加藤師が兼任し、教員分は村から８円、説教所担任料は本山から８円で担任した。

１２月頃になって、加藤会長、仙蔵副会長の下に仏教彰徳会を組織する。これまた未開の地で講話または種々な方法で開経に奔走した。

注：常楽寺

岐阜地区の入植者の多くは、美濃念仏宗ともいわれ、浄土真宗本願寺派の門徒であった集団で、入植後も故郷での風俗習慣を一緒に持ち込んできた。…開拓の鍬を振るいながら…寄り講と称して一軒に集まり、特に信仰の厚い老人から仏法の話を聞いたと伝えられている。

…お寺がないことから…なげく人が多くなり、明治３３年正月に、地区住民協議の上、網走町光輪寺住職の矢田谷晃道師に相談し、永住するためには寺院の必要があるという

ことになり、説教所の建設と、布教師の差し向けを本山に出願した。
　さらに同年５月に、説教所を教育所と兼ねて、西５線７号…の４００坪の土地に、草葺き、草囲いの２０坪の曲り屋が建設された。同時に基本財産として土地２町１反が寄進され、檀家２３戸で発足した。
　やがて７月になり、広島県人加藤徹玄師が妻子を連れて来住した。加藤師は林与平宅を庫裡として布教活動に入り、９月からは教育所の教師も兼ねて、熱心に布教活動にあたった。本山から布教所担任料８円、村から教師分として９円を支給したという。
　１２月に入り、加藤師を中心に仏教彰徳会が発足し、翌年１１月までに１８回の幻灯会などが開催された。浄土三部経典や釈迦、親鸞、蓮如などの上人たちの生涯に関するスライドや、児童教育、衛生教育、農事教育などにより、だんだんと信者戸数も増加、岐阜地区はもちろん、全村的に広まり、様佐呂間、幌岩方面まで信者が増加したという。
　明治３５年になり、檀家待望の説教所の認可が本山から正式に下り、浄土真宗本願寺派説教所となった。　　（岐阜開基百年記念史）